

いつものように夜空を眺めている少女がいました。その少女は木立に背中を預けています。綺麗な夜空でした。明るく照らしているのは月の影です。綺麗に光っているのは少女も同じでしょうか。それとも不思議な焦点を見つめている一人の少女は希望を持っているのでしょうか。わかりません。

ただ、私はこれだけは言えます。

少女が大人になったとき、夜空が消えて朝だけになっているという事実を。

心の問題ではなく、綺麗な思い出ということでもなくて。それだけで満足できるということ。少女は「彼女」と呼ばれるときになると知ることでしょう。綺麗な星空は相変わず綺麗です。重ねて言いますが、私は彼女の思い出をひっそりと涙しながら思い出そうとしている、そんな自分に呆れ加減も知らない馬鹿な人がいるのだとしているのです。何が言いたいのかも明白ではない個人的見解をきつとこれからもするのでしょうか。きつと、きつと。

いつしか、夜空に暁の光が輝いています。それが私には神様がいるのではないのかと思案させてもらっているのです。私にはわかりません。どうしてもという言葉はこういう時に使うのでしょうか。私にはわかりません。

ただただ、そんな風に言葉を持つ意味はなく、空に一つの月が夜空に妖しく輝くのでしょうか。森の中を全て暗く染め上げるのはキャンパスに向かう画家にでもできないこと。私にはそんな無力感が感じられたのです。どうしてか、そんな無力感を感じたのです。

いつも、何かをするときに突然のように思われる時があります。それだけ無謀なのでしょう。何もしないのは自分でもわかりません。ただ、何かをするということは代償行為を起こしているとかわかってもらえただけ無駄でしょう。いつものように、いつものように。

笑っているのは何でしょう。きつと答えというものが存在するのなら、少女を彼女と呼ぶ時があると信じていることが答えなのかもしれません。何かは何かであり、考えられることがあるだけでも、それだけでも少女は考えるだけで楽しいと思っているのでしょう。恐らくこれからは何者も少女を止めることができない、いやどんな人でも少女の心の行く先は止めるほどの権力や力や言葉は持っていないのだと、少女を見ているとそう信じてしまうのがあるのだと人は気付くのでしょうか。何もしないでも、答えはありふれている。

人はその姿を見て「猥褻的な姿だな」と、思ったり「偽善者ぶっている偽者」と考えるのかもしれません。ですが、知というものは人によって様々な答えを産み出します。その対象に対する答えを持っているのが一番の早道なのかもしれませんし、それを度外視することが答えなのかもしれません。

少女は大人になる過程で何を知るのでしょう。人はそれを支えてあげたいと思ったり、壊したくなる衝動で付き合う人がいるのかもしれません。それでも少女は言うでしょう。

「こんな夜空に素敵な出会いがあるなんて」

少女はいろんなことを考えています。そして夜空に輝く妖しい月の姿と光の強さを言葉にしようと思死です。綺麗事なんて言っていないけど、それでも自分の幸せについて考えているのか、それともそのどちらでもないことなのか。少女にしかわからないことはたくさんあります。たくさんあって、それだけ、比率の無駄もあるのでしょうか。世界は少女を認めるのでしょうか。少女は世界に認められるのか。私にはわかりません。ですが、それでも基本的にはものに頼ってきたことは事実です。だからそのことに考えられるのなら、ついに、世界と係わりがあるのだと思つたようです。

周りの気配を何も感じず、ただ森林の中の風が通るざわめき音を聞いている少女。そして茂みの中にいる何匹かの生き物に思いつきり声をあげて驚かせる。風は何もせずに、ただ海辺の香りを漂わせる綺麗な感覚を作り上げるだけ。

少女はよくわかっています。何もしいでもないのだと。何もなくても変わりはないのだと。そしてこれからも何もなくても特に苦労する必要がないことも。いつしか世界は笑っているのです。「貴女はもう大人よ」と言つて、彼女と呼ぼうとしました。

その時です。風がいきなり風ぎました。思い切つて、夜空に深け込む姿を風が掬いました。そのままそこには餌と思つていた少女の姿が消えて、生き物たちの気配が共に消えました。跡には座つていた地面に綺麗な円が作られていることに気付いたのは誰もいませんでした。

少女の身体は浮いています。どこにでもいそうな体をした少女はその場で浮いています。そのことに何も疑いを持っていないのは気のせいではないのでしょうか。少女は満面の笑みで空を見つめています。

今は蒼空。晴天真つ盛りな青い空がペンキで塗られた壁面のように蒼かったのです。少女のときめく心は「彼女」に成長していくのかどうかはわかりません。それでも世界のことをいたく思う人は欠片も思わなかったのでしょうか。少女の心に精神的なショックを与えたことが全ての始まりだと知ったときはいつだったのでしょうか。少女は何も思わず、空を見上げて、ゆつくりと地面へと降ります。その衝撃で大地が揺れました。よほどのことがない限り揺れることがない大地が緩んでいるのでしょうか。少女の重さは草原にそよぐ草ぐらの重さしかありません。それでも揺れるなんて。このことを知ってから、人々は後にこう思ったそうです。

妖精の仕業か、と。

この世界は摩のつく力が及び始めていると思われるようで、世界的には何も失われることなく世界は変わらず。いつまで経っても変わらないのは世界だからでしょうか。それとも、世界の事を考えているからなのでしょう。わかりません。ですが、すぐに終わったようではないのでしょうか。少女は草原の草に触れて一つ、千切ります。それを手に載せて、一つの仕事をします。

舞姫。

それが妥当だと人々は認識しました。踊るかにようにその場を回ります。綺麗な踊りを見せている人たちに好きなことをしているんだと教えているようです。手を上げ、足をステップの踏み込み、そして一回りして。

「ふう。今日も汗かいちゃったな」

少女は笑いました。踊りを止めて、周りを見てようやく少女は驚きました。

「ここ、どこ？」

右を見ました。左を見ました。上を見ました、空がありました。下を見ました、碧い草原が広がっていました。私はどこににいるのかな？ そんなことを考えているようです。

とりあえず、広がっている草原に私の身体があるのだということは自覚しました。そして樹々がよく見れば林立かの如く立ち並んでいる前に広がっている光景でした。その奥には何があるのかはわかりませんが、一つの道を形成するかのように草原の真ん中に土がならされていました。変わりのない光景だったはずの夜空は今ではわかりません。それでも少女は特に驚くことがここにいないこと以外は内容で、楽しそうな笑顔でその道を進んでいきました。

どうしても、と答える少年の姿がそこにはあった。綺麗事なんて絶対的に嫌だということに気が付いた少年はその女の後を見ている。姿だけ確認しているのはどうしてかということも気が付かない。それだけ悪いことをしているかのようなそんな思い込みもあるのだと信じている

のだろうか。

少年がいる場所は一つの個室。天井にある、シャングリラが明滅を繰り返す。一つのことをまるで確かめるかのように辺りを照らす。壁に貼られているように置かれている鏡がこの部屋を映し出す。一つのタンス、一つのクローゼット。そして一つの机。そこに少年は手を組んで壁に貼られている一つの古ぼけた写真を見つめている。

「奈弥。なぜ、君は幼児退行をしているんだ」

わからないと、少年は愚痴をこぼす。何がきっかけで何があつて、そしてこれから何を考えていた毎日が当たり前のように世界を知っているのだと、それだけは確実だった。いつものように暮らしていた、一つの部屋の中で二人は暮らしていたのだと言いたいのだろうか。

わからない、と。

少年はなぜ、大人びた口調を壊さず、そのまま何事かを呟く。その呟きは誰にも聞こえていない。そして窓から斜光が差し込む。それに輝きが見えるこの世界のこと。一人で何をしているのかを教えてほしいと、誰に何を求めているのかもわからない。一人、寂しそうに見つめる瞳が全てを教えてくれていたのが今でも覚えている。それを忘れるわけがないのだから少年の心はいつも破顔していたのに。そう言いたげなそれは教えていた。いつものように暮らしたい。いつものことを思い出したい。記憶に封印されてしまった事実をどうしても思い出したいと思っているのはどうしてだろうか。それがいつしか少年の姿を作り出す。世界は変わらない。世

界のことを知りたくて、何かを狭い視野の中で見つめているのだろうか。それでも良かった。それが良かった。そんなことを少年は思っている。

苦悩と苦悶が続く表情。いつも見つめているのは何をしているのかを覚えているのだろうか。それがそれだけに世間のことを知らずにここまで未来を創り上げてきたことが自慢だったのに。わからない、と。

少年は指を振る。すると、写真が消えた。何かの駆動音が止まる。そして草原に満ちた陽光が久しぶりにこの個室に入り込んできた。先ほどから数刻の時が経っていた。

いつの間に、と。少年は思っていたようだ。ここは時も狂っているのだろうか。わからない。わからない、と。

少年は椅子から立ち上がった。

なんとなしに少女は思うそうです。綺麗な世界の中で何をしているのかもわからない、自分のことを馬鹿な人間なのだと。たとえ、自分が素敵な人でもどんな人にも叶うわけないのだと、それが当たり前なのだと。ただし、少女は森の中に入ってみるとすぐにわかるそうです。鳥の鳴き声、虫の囁き。その中に可愛らしい同類を見つけました。

「あ、妖精さんだ。やつほー！」

大きな声を出して、妖精の目の前まで突撃していきます。綺麗な羽根が羽毛を包んでいます。

面白いまでに輝いているのは光があちらこちらに差し込む、そんな幻想的な世界。そんななか、妖精さんは少女を振り向く。

「誰？ 私たちのことを知っている人なんてあまりいないと思うんだけど。でも、いるのかな？」

妖精さんは上空を彷徨っています。綺麗な光に当たりながら、綺麗な羽根が、綺麗に輝いている。面白いぐらいに、楽しんでいるのでしょうか。わかりませんが、それでも世界のことを知っているのはその世界にいるものが知っているのは当然のこと。そのことに気付いている、少女は思いつき尋ねました。

「ここ、思い出の場所だよね？」

思いつき妖精さんの笑いのツボを取ったようで、吹き出しました妖精さんたち。

どちらにしろ、私の姿を認めているのがあるのなら、もう少女のことを忘れていこうよと、妖精さんたちは一緒に呟いて夜空を共に眺めました。